

第三十二章

徳田秋声氏は硯友社出身であった。例の横寺町の紅葉山人の家塾——庭からすぐ行けるようになって二階建の家塾の中で、風葉、春葉、白峰などと一緒に暮らした文学青年のひとりであった。何でもかれは金沢から桐生悠々などと一緒に出て来て、そして藻社の群の中に入れて貰った。それにも拘らず、硯友社の江戸趣味——都会趣味は、その感化を十分にかれに与えることは出来なかつたらしかった。

それにかれは藻社の連中に比して、学問があつた。英語にも通じていた。その当時口にした外国の作家の作品を読むことも出来た。それに、割合に煩悶の多い、思慮の深い青年であつた。同じ遊ぶにしても、風葉春葉などとはおのずから選を異にしていた。

かれも矢張私達と同じように、『しがらみ草紙』の翻訳を読んだり、『文学界』を読んだりしたひとりだ。私の記憶では、『文芸倶楽部』に『藪柑子』という小説を掲げて、ちよつと評判が好かつたのが、一番最初であつたように思われる。今でもそうのように、その作には何処かしつかりしたところと暗いジミなところがあつたように覚えている。かれと春葉とでは、無論春葉の方が評判が好かつたようだ。私などでも、春葉の方が好くなりはないかと思つたくらいである。春葉の筆には、何処か人好きのするところがあり、それに、深く家庭の心理に入つて行くような長所を持つていた。それがあべこべに、春葉は段々家庭小説家の安きに就き、秋声は『雲の行方』あたりから次第にその実力を認められて、通俗がかつたような作品を常に発表してゐたのにも拘らず、段々その堅い地歩を文壇に占めるようになって行つた。

それはもう余程後のことであつたが、ある批評家はある時かれをドイツのヘルマン・バングに比した。つまりそのジミな堅い手法と何処かねばりの強いところのあるのを比べたのである。成ほどそういうところがある。その短篇などにも、その構造に於て、その感じに於て、小じんまりした形に於て、何処か似たところが無いではなかつた。作中人物の描き方などに於ても、何処か類似した点があつた。

性格描写ということ——それは誰あたりから一番多く言われたかというのに、早稲田側、即ち坪内氏あたりが一番先きにそれを言つたようであつた。硯友社では、紅葉はあまり性格描写と云うことを言わなかつた筈だ。硯友社でもし言つたものがあるとするれば、柳浪が一番多くそれを言いはしなかつたろうかと思ふ。しかし、それは措くとして、何しろ一時性格描写ということが非常に喧しく言われたことがあつたのを私は記憶している。性格が書いていなければ駄目だ。性格が真に迫つていなければ駄目だ。『だって、いくら自然がよく書いていたって、キャラクターが書いていないじゃないか』こういう風な批評がよく批評家の口から出た。その時分には、コンポジションだとか、コンストラクションだとか、気分だとか、そういうことについてはあまり多くは言われなかつた。

何でも宙外、抱月あたりが頻りにこの性格描写を論じたらしかった。

少なくとも秋声氏はその中から出て来たような作家であった。かれははっきりと人間を描き出すことが上手だ。はっきりと性格を浮び上らせることが上手だ。つまりその時代の文壇の空気がよくかれを導いたのであった。またかれの方から言ってみると、その性格描写論の好いところをかれは取って、そしてそのために他の自由を失うような愚に陥らなかつたのである。この点でもかれはヘルマン・バングに似ていると言って差支えないのである。

『そうだね。徳田君は、何んなつらい空気の中においても、容易に碎けることのないような人だね。大丈夫な人だね。しっかりしたところのある人だね』

こう私達はかれについて言ったことがあったが、実際、かれなればこそ、秋声氏なればこそ、硯友社の群の中から新しい時代の巴渦の唯中に出て、流されも碎かれもせず、今日までやって来たのであった。愚痴を滴しながら、いろいろな潮流にも圧倒されずに、此処までやって来たのであった。私はそれを大変に面白いと思った。

かれは風葉が田舎に帰った頃から、頻りに新意を出そうとして苦心した。その頃のもの、いろいろな作があったが、金港堂の『文芸界』の誌上に載せた『春光』などは、ことにそういう意味に於て骨を折ったものであるらしかった。

※本文の表記は、常用漢字・新かな遣いに改めた。

※出典『近代の小説』第三十三章 大正12年2月18日